

## まちの保健室

脇野 千恵

### 性教育元年！

M先生との様々な人権学習は、私のその後の教育実践に大きな影響を与えました。

今から35年以上前、臨時講師という立場は、勤務上も教諭と大きな格差がありました。小学校では、教諭と変わらず担任をしなければなりません。しかし、教員のための研修に参加させてもらえないこともあり、自分で学び場を見つけるしかありませんでした。性教育に限らず、週末には自身の時間とお金を使って研修に明け暮れたものです。

本格的に性教育を学びきっかけになったのが、1992年(平成4年)に学習指導要領が改訂されたことでした。「性に関する指導」として、小学校5年生用に「保健」の教科書ができ、「初経」や「精通」が登場しました。また理科では「ヒトの誕生」が入ったのです。性に関する具体的な指導が盛り込まれたことで、その年は「性教育元年」と呼ばれました。

指導要領の逸脱と言って随分非難されたけれど、この改訂は性教育実践の後押しをしてくれるものでした。

そして保健に関する指導は、主に養護教諭の担当ですが、指導要領の改訂によって、性教育を学級担任がしなければならなくなったのです。

一方で、当時はエイズ(後天性免疫不全症候群)に対して「正しい知識を持とう」という政府からの宣伝が展開されていました。「エイズ教育」(教育ではないのですが…)が学校の研究授業として公開されるなど、性教育を推進する者にとっては、堂々と実践できる良いチャンスとなりました。

次の転勤先で、「性教育を一緒に取り組んでもいいよ」と言ってくれる教諭のT先生がいました。

その学校も、性教育のカリキュラムが曖昧でした。私たちは職員に理解をしてもらう前に、自身が性教育についてちゃんとした知識を身につけたいと思っていました。

その頃私たちは、朝日新聞社が性教育やエイズ問題について取材したものを26回にわたって連載していた記事を読んでいました。スウェーデンの性教育を紹介し、日本の性教育の実態なども掲載していました。その中に、1980年ごろから日本での性教育の必要性について提言していたスペシャリスト、山本直英さんの講演会の告知がありました。

T先生は、

「新聞の記事見た？この人の講演会に行こうや！」

と声をかけてくれました。

大阪での講演会でしたが、このことがきっかけで、私は性教育にすっかり魅せられてしまい、以降性教育漬けになっていきました。

講演の内容は目から鱗でした。それまでM先生と格闘していた命の学習は、間違っていなかったと確信したものです。



その会場で出会ったのが、新聞の記事を書いた記者の西垣戸勝さん。彼はまもなく、小中学校のユニークな授業実践の紹介や子どもの実態など丁寧な取材を元に、『性教育は、いま』（1993年）という本を出版しました。その中で彼は、『「性」というものを、人として生まれてから死ぬまでの生き方の問題として、捉えられるかどうか。子に教える前に、私たち大人自身が学ばなければならないのではないか。』と書いています。

取材中、執筆中もずっと自問自答してき

たとも語っています。西垣戸さんとはその後、色々なセミナーでの取材でお世話になりました。

## 性教育は女がやるもん？

どこの学校でも、性教育の担当は女性教員です。性教育について論じたり研究したりする人も、実に女性が多い。なんでやろ？

実はT先生は男性教諭でした。しかも20代でした。私は彼に、

「なんで性教育に興味あるの？」

と聞くと、

「自分がちゃんと性について教えてもらえなかったことかな…。それと、困ったことも誰に聞いたらええかわからなかった」

という答えが返ってきました。

私は少しの驚きと共に、性は産むことや命の尊厳など、どちらかという女性目線で語られることが多く、男性が捉えている性について考えることがなかったなと気づきました。そして、いつも女は損だとか差別的に扱われているとか…「女だから？何！」と、何かにつけて男性を目の敵にしていたことにも…。猛反省です。

西垣戸さんも男性記者です。当時性教育をテーマに記事を書くことは、男社会の新聞社では、かなりの反発があったのではないのでしょうか。男がなんでや！と叱られる場面もあったのではないのでしょうか。最近知り合った女性の記者から、性に関わる記事（性被害、セクハラなど）はなかなか大きく扱ってもらえないと聞きました。時代は変わり女性の記者も増えているのに、仕事の内容には、いまだに男女格差があるようですね。

T先生が男性であることと、その彼が子

どもたちへの性教育の必要性を訴えたことは、その学校の雰囲気を変えていくことになりました。職員への性教育の理解度もぐっと深まり、教材作りや指導案の計画など協力して取り組む教員も増えました。学校の性教育年間計画も整い、その市全体の小学校での実践が広がっていったのは、彼のおかげです。今から振り返れば、この頃が一番充実した日々でした。

あの頃は、普通に「性交」の授業ができていたなあと思うとなつかしいです。

「先生とはその後、民間団体が主催する性教育セミナーに参加することになりました。性教育元年という年でもあり、千人以上の参加者が集まり、会場は熱気がこもり、こんなに性教育を学ぼうとする人たちがいるのかと驚いたものです。私たちは、ほぼカルチャーショック状態でした。

壇上のシンポジウムでは、もちろん男性のパネリストが…。

“すごい、性について語れる男性がいるんや！”と思いました。何より嬉しかったのは、そこで再び山本直英さんに出会うことができたことです。

今でも彼の著書『子育てのなかの性教育』（1989年）をバイブルのように大切に持っています。30年以上前に書かれたものですが、その一つ一つの項目について、今日本の教育現場で実践されているかと問われると、「されていません！むしろ間違いなく後退しています！」と答えますね。

つづく

